

Ⅱ 大麦（小麦）、だいでず・そば・あずき

1 麦類病害虫

麦類病害虫重点防除指導方針

大麦（小麦）は、水田営農の活性化を図る基幹作物として位置付けられている。

生産安定および品質向上を図るため、耕種的防除対策に努めるとともに、病害虫の発生動向に注意して適正な薬剤防除を推進する。

1 耕種的防除の推進

大麦（小麦）の栽培にあたり排水対策を十分に行うとともに、融雪促進を推進する。

2 主要病害虫の防除技術

種子伝染性の病害を防ぐため、健全種子への更新および種子消毒を推進する。

赤かび病の発生は、品質を低下させ商品価値をなくすので、穂揃期（開花期）とその7～10日後の2回防除を基本とする。多発が予想される場合には、使用時期を厳守しながらもう1回の薬剤散布を実施する。

(1) 大麦・小麦薬剤一覧

RPA

病害虫名		薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	備考				
斑葉病	播種前	トリフミン水和剤	トリフミン水和剤	3		種子重量の0.5%	-	は種前	種子粉衣	1回					
		ベントコート	チラム・ベントコート	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦				
		ベント水和剤20	チラム・ベント水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦				
												20倍	は種前	10～20分間種子浸漬	1回
												200倍	は種前	6～24時間種子浸漬	1回
		ホマイ水和剤	チラム・チオファネートメチル水和剤	1		種子重量の0.5～1.0%		は種前	種子粉衣	1回	麦類(小麦を除く)				
												200倍	は種前	6～24時間種子浸漬	1回
種子重量の0.5～1.0%	は種前											種子粉衣	1回	小麦	
200倍	は種前											6～24時間種子浸漬	1回	小麦	
なまぐさ黒穂病	播種前	トリフミン水和剤	トリフミン水和剤	3		種子重量の0.5%	-	は種前	種子粉衣	1回					
		ベントコート	チラム・ベントコート	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦				
		ベント水和剤20	チラム・ベント水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦				
												20倍	は種前	10～20分間種子浸漬	1回
												200倍	は種前	6～24時間種子浸漬	1回
		ホマイ水和剤	チラム・チオファネートメチル水和剤	1		種子重量の0.5～1.0%		は種前	種子粉衣	1回	麦類(小麦を除く)				
												200倍	は種前	6～24時間種子浸漬	1回
種子重量の0.5～1.0%	は種前											種子粉衣	1回	小麦	
200倍	は種前											6～24時間種子浸漬	1回	小麦	
裸黒穂病	播種前	トリフミン水和剤	トリフミン水和剤	3		種子重量の0.5%	-	は種前	種子粉衣	1回	麦類				
		ベントコート	チラム・ベントコート	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦				
		ベント水和剤20	チラム・ベント水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦				
												200倍	は種前	6～24時間種子浸漬	1回
雲形病	播種前	ベント水和剤20	チラム・ベント水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦				
	3月下旬～4月上旬	フルト乳剤25	プロビコナゾール乳剤	3		1000倍	60～150%/10a	収穫21日前まで	散布	1回	大麦				
雪腐病	根雪前	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	1		1000～2500倍	60～150%/10a	根雪前	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦				
						1000～2500倍	60～150%/10a	根雪前	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)				
うどんこ病	発生初期	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	1		1000～2000倍	60～150%/10a	収穫30日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)				
						1000～2000倍	60～150%/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦				
赤かび病	1回目 開花期(穂揃期) 2回目 1回目の7～10日後	シルバキアフロアブル	テブコナゾール水和剤	3		2000倍	60～150%/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	小麦				
						2000倍	60～150%/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	大麦				
						16倍	0.8%/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	2回以内	大麦				
						16倍	0.8%/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	小麦				
		ストロビフロアブル	クレシキメチル水和剤	11		2000～3000倍	60～150%/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	麦類(小麦を除く)				
						2000～3000倍	60～150%/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	小麦				
		フルト乳剤25	プロビコナゾール乳剤	3		8倍	800mL/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	1回	大麦				
						8倍	800mL/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	3回以内	小麦				
						1000～2000倍	60～150%/10a	収穫3日前まで	散布	3回以内	小麦				
						1000～2000倍	60～150%/10a	収穫21日前まで	散布	1回	大麦				
		トップジンMゾル	チオファネートメチル水和剤	1		8倍	0.8%/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦				
						8倍	0.8%/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)				
		トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	1		1000～1500倍	60～150%/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦				
						1000～1500倍	60～150%/10a	収穫30日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)				
		トップジンM粉剤DL	チオファネートメチル粉剤	1		3～4kg/10a		収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦				
4kg/10a						収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)						
トリフミン水和剤	トリフミン水和剤	3		1000～2000倍	60～150%/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内							
ミラビスフロアブル	ビジフルメトフェン水和剤	7		8～16倍	800mL/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	2回以内	大麦						
				1500～2000倍	60～150%/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	大麦						
ワークアップフロアブル	メコナゾール水和剤	3		10～24倍	0.8%/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	3回以内							
				2000～3000倍	60～150%/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内							
ワークアップ粉剤DL	メコナゾール粉剤	3		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内							

(2) 大麦赤かび病の体系防除

大麦の赤かび病は、穂揃期（開花期）とその7～10日後に防除するのが最も防除効果が高い。
このため、2回防除を基本とする。

〔防除体系と防除効果〕

防除体系		1回目：穂揃期（開花期）	2回目：1回目の7～10日後	防除効果
体系1	液剤＋液剤	動 噴	動 噴	◎
		動 噴	無人航空機	◎
		無人航空機	無人航空機	◎
体系2	粉剤＋液剤	動 散	動 噴	○
		動 散	無人航空機	○
体系3	粉剤＋粉剤	動 散	動 散	○

〔体系1〕

液剤（噴霧機）＋液剤（噴霧機 or 無人航空機）

1回目＝穂揃期（開花期）	散布方法	+	2回目 ＝1回目防除の7～10日後	散布方法
トップジンM水和剤 シルバキュアフロアブル ミラビスフロアブル	噴霧機		ストロビーフロアブル トリフミン水和剤	噴霧機
			チルト乳剤25	

液剤（無人航空機）＋液剤（無人航空機）

1回目＝穂揃期（開花期）	散布方法	+	2回目 ＝1回目防除の7～10日後	散布方法
トップジンMゾル シルバキュアフロアブル ワークアップフロアブル ミラビスフロアブル	無人航空機		チルト乳剤25	無人航空機

〔体系2〕

粉剤（動散）＋液剤（噴霧機 or 無人航空機）

1回目＝穂揃期（開花期）	散布方法	+	2回目 ＝1回目防除の7～10日後	散布方法
トップジンM粉剤DL ワークアップ粉剤DL	動散		ストロビーフロアブル トリフミン水和剤	噴霧機
			チルト乳剤25 ミラビスフロアブル	

〔体系3〕

粉剤（動散）＋粉剤（動散）

1回目＝穂揃期（開花期）	散布方法	+	2回目 ＝1回目防除の7～10日後	散布方法
トップジンM粉剤DL	動散		ワークアップ粉剤DL	動散

(3) 麦類注意事項

なまぐさ黒穂病、裸黒穂病、雲形病

〔種子消毒〕

- ・浸漬薬液の量は種子容量と同等以上とし、液温は10℃以上で消毒する。
- ・浸漬消毒は、浸漬中に2～3回袋を上下するか種子を攪拌する。

〔耕種的防除〕

- ・採種圃産種子を使用する。
- ・発病株は、抜き取って処分する。

裸黒穂病

- ・黒穂株は健全株よりやや早く出穂するため、早期に抜き取り周辺株への伝染を防ぐ。

雲形病

〔耕種的防除〕

- ・播種期が早いと秋期の感染、発病が多くなるので、適期に播種する。
- ・厚撒き、窒素肥料過多で、発病が多くなる。
- ・発病跡地の刈り株、こぼれ麦は放置せず、地中にすき込むなどして処分する。

雪腐病

- ・紅色雪腐病は、排水の良い軽しょう土(火山灰土)や施肥量の少ない場合、発生しやすい。
- ・紅色雪腐病は、種子伝染する。
- ・褐色雪腐病は、排水不良など重粘土や融雪時に停滞水が多い場合に発生しやすい。
- ・雪腐小粒菌核病は、褐色雪腐病との併発が多い。病原力が弱く、被害は比較的少ないが、根雪の期間が長くなる山間、山沿い地帯に多い。

〔耕種的防除〕

- ・圃場の排水をはかる(うね立て時だけでなく、根雪前にも排水溝を整備する)。
- ・播種期が遅れると被害を受けやすくなるので、必ず適期に播種する。
- ・根雪前の窒素肥料の多用を避ける。
- ・前作に多発生した圃場は、作付けを避ける。

うどんこ病

- ・下葉から発生する。
- ・発病したら、早期に薬剤を散布する。
- ・薬剤は下葉にも十分にかかるよう散布する。

赤かび病

- ・ 出穂後、開花時に平均気温が 15℃以上で、降雨が続くとき多発する。
- ・ 本病発病麦は別仕分けを行い、食用や飼料用に使用しない。
- ・ 薬剤を選ぶ際は RAC コードを確認し、同一成分の薬剤連用は避ける。
- ・ 使用時期が「収穫 30 日前まで」の薬剤は、2 回目の使用を避ける。
- ・ トリフミン水和剤は出穂期から使用できるが、穂揃期での使用が効果的である。

株腐病

- ・ 暖冬年に発生が多い。

〔耕種的防除〕

- ・ 播種前に、消石灰などを 100～150kg/10a 施用する。
- ・ 播種期が早いと秋期の感染が多くなるため、適期に播種する。
- ・ 春の発病を減らすため、厚播きを避ける。
- ・ 発病が多い場合は、連作を避ける。
- ・ 被害麦稈を取り除く。

2 だいず・そば・あずき病害虫

だいず・そば・あずき病害虫重点防除指導方針

だいず、そば等は、大麦のあとの周年型作物として位置付けられている。
特に、そばは中山間地域等における地域特産物として生産されている。
収量・品質の高位安定化を図るため、耕種的防除対策に努めるとともに、病害虫の発生動向に注意して適正な防除を推進する。

1 耕種的防除の推進

だいず、そばの栽培にあたり、排水対策を十分に行うとともに圃場および圃場周辺の雑草の刈り取りを推進する。

2 主要病害虫の防除技術

紫斑病等種子伝染性病害を防ぐため、健全種子への更新および種子消毒を推進する。

葉焼病、ウコンノメイガは発生状況を確認し、遅れずに防除（臨機）を行う。

カメムシ類、シロイチモジマダラメイガ、フタスジヒメハムシを防除するため、子実肥大期を中心に3回（基幹）防除を推進する。

(1) だいず病害虫の要防除水準

カメムシ類の要防除水準

圃場内での調査を行い、カメムシ類の発生状況を的確に把握した上で、要防除水準に基づく効率的な防除を実施し、環境負荷の少ない防除を推進する。

1 要防除水準

8月下旬（圃場侵入期）は100茎あたり0.3頭以上、9月中旬（発生最盛期）は100茎あたり4.0頭以上の場合は防除する。

2 調査方法

8月下旬と9月中旬に、1圃場あたり100茎ずつ3か所の見とり調査を行う。

フタスジヒメハムシの要防除水準

1 要防除水準

8月下旬（第2世代成虫発生最盛期）に払い落としを行い、1.5m、2条当たり約70頭以上の場合は直ちに防除する。

2 調査方法

長さ150cm、幅80cmの払い落とし用シートを条間に広げてシートの両端から2人で両側の株をたたき、成虫をシート上に落とす。1圃場につき、3か所行う。

葉焼病の要防除水準

1 要防除水準

開花期に発病葉率16.5%以上は、ただちに防除する。

2 調査方法

開花期に圃場内で発生が多い場所を選び、10株以上の全葉数および発病葉数を調べ、発病葉率を求める。

(2) だいず薬剤一覧

RPA

病害虫名	防除時期	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	備考
紫斑病	播種前	キヒゲンR-270アブル	チラム水和剤	M3		乾燥種子1kg 当り原液20mL		は種前	塗沫処理	1回	
		クルザ-MAXX	チアトキサム・フルジ・オキソニル・メタラキシルM水和剤	4A,1 2,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
	開花期後 20～30日	アミスター-2070アブル	アゾキストロピン水和剤	11		2000～3000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤	1,10		1000倍	100～300%/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	
		ファンタジスタアブル	ビリベシカルブ水和剤	11		1000～2000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
						16倍	0.8%/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	3回以内	
		アミスターレボンSE	エトフェンブ・ロックス・アゾキストロピン水和剤	3A,1 1		1000倍	100～400%/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
	トライアアブル	テブフロキソ水和剤	U16		1000倍	100～300%/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内		
8倍					0.8%/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	2回以内			
開花期後 15～30日	Zボルト-粉剤DL	銅粉剤	M1		3kg/10a		-	散布	-		
葉焼病	初発時 (7月下旬頃)	フェスティバルC水和剤	ジメトモル・銅水和剤	M1,4 0		600倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
茎疫病	播種前	クルザ-MAXX	チアトキサム・フルジ・オキソニル・メタラキシルM水和剤	4A,1 2,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
アブラムシ類	播種前	クルザ-FS30	チアトキサム水和剤	4A		乾燥種子1kg 当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		クルザ-MAXX	チアトキサム・フルジ・オキソニル・メタラキシルM水和剤	4A,1 2,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
	生育期	マラソン乳剤	マラソン乳剤	1B		2000～3000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
		マラソン粉剤3	マラソン粉剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
タネバエ	播種前	クルザ-FS30	チアトキサム水和剤	4A		乾燥種子1kg 当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		クルザ-MAXX	チアトキサム・フルジ・オキソニル・メタラキシルM水和剤	4A,1 2,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
ネキリムシ類	播種前	クルザ-FS30	チアトキサム水和剤	4A		乾燥種子1kg 当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		クルザ-MAXX	チアトキサム・フルジ・オキソニル・メタラキシルM水和剤	4A,1 2,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
カメムシ類	若莢～子実肥大期 8～9月	アルパリン粉剤DL	ジメテフラン粉剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		エルサン乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		カスケード乳剤	フルフェノキサロン乳剤	15		4000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						32倍	0.8%/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
		スタークル液剤10	ジメテフラン液剤	4A		1000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						8倍	0.8%/10a	収穫7日前まで	空中散布	2回以内	
						8倍	0.8%/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
		スタークル粉剤DL	ジメテフラン粉剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		スミチオン粉剤3DL	MEP粉剤	1B		4kg/10a		収穫21日前まで	散布	4回以内	
		ダントツH粉剤DL	クロチアジメチル粉剤	4A		3～4kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
	トレボン乳剤	エトフェンブ・ロックス乳剤	3A		1000倍	100～300%/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内		
	トレボン粉剤DL	エトフェンブ・ロックス粉剤	3A		-	4kg/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	豆類(種実)	
	アミスターレボンSE	エトフェンブ・ロックス・アゾキストロピン水和剤	3A,1 1		1000倍	100～400%/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内		
					8倍	800mL/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	2回以内		
若莢～子実肥大期 8月	ダイヤジン粉剤5	ダイヤジン粉剤	1B		4～6kg/10a		収穫30日前まで	散布	4回以内		
	ミネクトエクストラSC	シアントラニプロール・ルフェエロン水和剤	28,1 5		10000～12000 倍 40～80倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内		
シロイモシマダ ライメイガ	若莢伸長期	エルサン乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1500～2000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ダイヤジン粉剤5	ダイヤジン粉剤	1B		4～6kg/10a		収穫30日前まで	散布	4回以内	
		トレボン乳剤	エトフェンブ・ロックス乳剤	3A		1000倍	100～300%/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
		バーマチオン水和剤	フェンハレト・MEP水和剤	1B,3 A	劇	1000～2000倍	100～300%/10a	収穫21日前まで	散布	3回以内	
		トレボン粉剤DL	エトフェンブ・ロックス粉剤	3A		-	4kg/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	豆類(種実)
マメシキイガ	子実肥大初期 8月	エルサン乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300%/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ミネクトエクストラSC	シアントラニプロール・ルフェエロン水和剤	28,1 5		10000～12000 倍 40～80倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	

病害虫名	防除時期	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	備考
タ'イ'サヤマ ハ'エ	開花終期～子実 肥大初期 8月上旬～中旬	スミチオン乳剤	MEP乳剤	1B		8倍	800mL/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	4回以内	
						1000倍	100～300% _{10a}	収穫21日前まで	散布	4回以内	
		ダ'イ'ジ'ノ'ン'粒'剤'5	ダ'イ'ジ'ノ'ン'粒'剤	1B		4～6kg/10a		収穫30日前まで	散布	4回以内	
ウ'コ'ノ'メ'イ'ガ'	7月下旬～8月 はじめ	ダ'ン'ツ'ク'粉'剤'DL	クロチアジン粉剤	4A		4kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ア'レ'バ'ソ'ン'フ'ロ'ア'ア'ル'5	クロチアジン粉剤	28		4000倍	100～300% _{10a}	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						16～32倍	0.8% _{10a}	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
		ヨ'バ'ル'フ'ロ'ア'ア'ル	テトラニリアロール水和剤	28		5000倍	100～300% _{10a}	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						50倍	1.6% _{10a}	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
ハ'ス'モ'ノ'ト'ウ'	生育期 若齢幼虫期	エルサン乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300% _{10a}	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		トレボ'ン'乳'剤	イトフェン'ロックス乳剤	3A		1000倍	100～300% _{10a}	収穫14日前まで	散布	2回以内	
		トレボ'ン'粉'剤'DL	イトフェン'ロックス粉剤	3A		-	4kg/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	豆類(種実)
		ア'レ'バ'ソ'ン'フ'ロ'ア'ア'ル'5	クロチアジン粉剤	28		16～32倍	0.8% _{10a}	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
						4000倍	100～300% _{10a}	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ベ'ネ'ビ'ア'OD	シアントラニリアロール水和剤	28		2000～4000倍	100～300% _{10a}	収穫7日前まで	散布	3回以内	
		マトリク'フ'ロ'ア'ア'ル	クロマフェジト水和剤	18		2000～3000倍	100～300% _{10a}	収穫前日まで	散布	3回以内	
						8～16倍	800mL/10a	収穫前日まで	無人航空機による散布	3回以内	
ハ'タ'ニ'類'	生育期	マ'ラ'ソ'ン'粉'剤'3	マ'ラ'ソ'ン'粉'剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
フ'タ'ス'ジ'ヒ'メ'ハ'ム'シ'	播種前	ケ'ル'ザ' -FS30	チアトキサム水和剤	4A		乾燥種子1kg 当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		ケ'ル'ザ' -MAXX	チアトキサム・フルジ'オキソニ ル・メタキシルM水和剤	4A,1 2,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
	8月下旬 第2世代発生期	ア'グ'ロ'ス'リ'ン'乳'剤	シ'ベ'ル'メ'ト'リ'ン'乳'剤	3A	劇	2000倍	100～300% _{10a}	収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ア'ル'バ'リ'ン'粉'剤'DL	ジ'ネ'フ'ラ'ン'粉'剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ス'タ'ー'ク'ル'液'剤'10	ジ'ネ'フ'ラ'ン'液'剤	4A		1000倍	100～300% _{10a}	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ス'タ'ー'ク'ル'粉'剤'DL	ジ'ネ'フ'ラ'ン'粉'剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ダ'ン'ツ'ク'粉'剤'DL	クロチアジン粉剤	4A		3～4kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	

(3) だいでず注意事項

紫斑病

- ・子実肥大期に雨が多いと多発する。
- ・種子伝染するので、優良種子を使用しクルーザーMAXXによる種子消毒を行う。
- ・耐性菌が発生している。
- ・耐性菌の発生を抑制するために、系統の異なる2剤を選択し、開花後20日目とその10日後（開花後30日目）に体系で散布する。
- ・アミスター20フロアブルは、開花後20～30日目の1回散布でも効果がある。

葉焼病

- ・初発時に効果の高いフェスティバルC水和剤を施用し、病害の蔓延を防ぐ。
- ・発生が多いほど小粒比率が高くなり、減収する。
- ・里のほほえみで発生が多い。

黒根腐病

- ・排水不良田での発生が多く、一度発生すると根絶することが困難。
- ・立枯れした株を抜くとゴボウ根になっており、手応え無く抜ける。株元に赤い子嚢殻が発生することがあり、発生が広がると減収する。
- ・発生した圃場は3年以上水稻を作付けし、菌の密度を下げる。

カメムシ

- ・8月20日頃と9月10日頃の2回防除すると効果が高い。
〔耕種的防除〕
- ・圃場周辺を除草する。

ダイズサヤタマバエ

- ・山間、山沿いで発生が多い。

ウコンノメイガ

- ・葉が巻きはじめる若齢幼虫期に防除する。
- ・山間、山沿いで発生が多い。

ハスモンヨトウ

- ・早期発見に努め、早めに防除する。
- ・白変葉が見え始めた時に、分散前に防除する。

(4) そば薬剤一覧

RPA

病害虫名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
ハモンヨトウ	ゼンターリ顆粒水和剤	BT水和剤	11A		2000倍	100～300 μ g/10a	発生初期 但し、収穫前日まで	散布	-
	ロムダ [®] ソフロアブル	テブフェノジド [®] 水和剤	18		2000倍	100～300 μ g/10a	収穫21日前まで	散布	2回以内
	ロムダ [®] ソフロアブルDL	テブフェノジド [®] 粉剤	18		4kg/10a		収穫21日前まで	散布	2回以内
ハモンヨトウ雄成虫	フェロモンSL	リトルア剤				2～4個/ha	成虫発生初期から発生終期まで	本剤をトラップ 1台当たり1個を取付けて配置する。取付けた薬剤は1.5～2ヵ月間隔で更新する。	

(5) あずき薬剤一覧

RPA

病害虫名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
アスキメカ	エルサン乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300 μ g/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内
アブラムシ類	マラソン乳剤	マラソン乳剤	1B		1000～3000倍	100～300 μ g/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内
	マラソン粉剤3	マラソン粉剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内
ハダニ類	マラソン乳剤	マラソン乳剤	1B		1000～3000倍	100～300 μ g/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内
	マラソン粉剤3	マラソン粉剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内


3 大麦（小麦）、だいず、そば除草剤

(1) 使用上の注意事項

畑作では水田作に比べて効果の幅が大きいので、使用する場合は圃場条件の確保、気象条件、各薬剤の作用特性などを十分に配慮する。

- ① は種後の土壌処理については、砂質土、低湿地などでは薬害が生じるほか殺草効果も劣るので使用を避ける（薬剤によっては、適用土壌が「壤土～埴土」となっているものもあるので注意する）。
- ② 土壌処理剤は、覆土後、雑草の発生期前までに、土壌表面に均一散布する。
- ③ 土壌処理の場合、砕土率を高めて覆土はやや厚めとする。
また、は種は浅まきとにならないように注意する（薬害防止のため）。
- ④ 薬剤の土壌表面処理の場合、薬剤が土中深く入り、作物の種子や根に直接薬剤が作用することがないように十分注意する。
- ⑤ 土壌が乾燥して極端に水分の少ない場合は効果が劣るので、散布水量を多めにしたり（薬剤使用量は基準どおり）降雨後に散布する。
- ⑥ 処理直後に激しい降雨にあうと薬害が発生し出芽および根その他の生育を抑えるので、処理後1～2日間は降雨にあわないよう天気予報等に注意し散布する。
- ⑦ 排水不良田では薬害が生ずるおそれがあるため、使用を避ける。
- ⑧ 生育期処理は、作物の生育を考慮して雑草発生～初期に散布する。
散布の際に、付近の作物にかからないよう注意する。

(2) 使用方法

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
大麦 (小麦)	は種直後 (雑草発生前)	クリアターン細粒剤F ベンチオカーブ 8.0% ペンディメタリン 0.80% リニュロン 1.2%	1 (1) (1) (1)	全面土壌散布 4～5kg	土壌全面均一に散布する。	<ul style="list-style-type: none"> ・対象雑草は1年生雑草。ただし、トレファノサイド乳剤、トレファノサイド粒剤2.5はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く。 ・サターンバアロの適用土壌は、壤土～埴土である。 ・散播栽培等覆土を行わない場合は散布しない。 ・砂土、わらだけの覆土、芽だしまきのときは散布を行わない。 ・覆土が浅いと薬害が出やすいので、覆土は細かく砕き、やや厚めとする。 ・ (トレファノサイド乳剤)
	は種直後 (雑草発生前)	クリアターン乳剤 ベンチオカーブ 50% ペンディメタリン 5% リニュロン 7.5%	1 (1) (1) (1)	全面土壌散布 500～700ml	70～100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後～ 発芽前 (雑草発生前)	サターンバアロ粒剤 ベンチオカーブ 8% プロメリン 0.8%	1 (1) (2)	全面土壌散布 3～5kg	土壌全面均一に散布する。	
	は種直後～ 麦出芽前	サターンバアロ乳剤 ベンチオカーブ 50% プロメリン 5%	1 (1) (2)	全面土壌散布 500～750ml	70～100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後 出芽前	トレファノサイド粒剤2.5 トリフルラリン 2.5%	2 (2)	全面土壌散布 4～5kg	土壌全面均一に散布する。	
	は種後 出芽前 (雑草発生前)	トレファノサイド乳剤 トリフルラリン44.5%	2 (2)	全面土壌散布 200～300ml	100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後 出芽前 (雑草発生前)	キックボクサー細粒剤F プロスルホカルブ 7% リニュロン 1.75%	1 (2) (1)	全面土壌散布 3～4kg	土壌全面均一に散布する。	
	は種後 出芽前 (雑草発生前)	ムギレンジャー乳剤 プロスルホカルブ46% リニュロン11.5%	1 (2) (1)	全面土壌散布 300～600ml	50～100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
大麦 (小麦)	は種後 出芽前～出 芽揃期 (雑草発生前)	バンバン細粒剤F エスプロカルブ6.0% ジフルフェニカン0.15%	1 (1) (1)	全面土壌散布 3～5kg	土壌全面均一 に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。 ・その他注意事項は前頁参 照。 ・砂土を除く。
	は種後 出芽前 (雑草発生前)	バンバン乳剤 エスプロカルブ60% ジフルフェニカン1.5%	1 (1) (1)	全面土壌散布 300～500 ml	100 lの水に溶 かして全面均 一に散布す る。	
	は種後 出芽前 (雑草発生前)	ガレーズ乳剤 ジフルフェニカン 3.7% トリフルラリン 37%	1 (1) (2)	全面土壌散布 200～250ml	100 lの水に溶 かして全面均 一に散布す る。	
	は種後発芽前 (雑草発生前) または 麦1～2葉期 (雑草発生前 ～発生始期)	ガレーズG ジフルフェニカン 0.15% トリフルラリン 2%	1 (1) (2)	全面土壌散布 4～5 kg	土壌全面均一 に散布する。	・対象雑草は畑地1年生雑 草。 ・その他注意事項は前頁参 照。 ・砂土を除く。
	生育期処理 は種後～ 麦2(小麦)葉期 (雑草発生前 ～発生始期)	ボクサー プロスルホカルブ 78.4%	2 (2)	雑草茎葉散布 又は 全面土壌散布 400～500ml	70～100 lの水 に溶かして全 面均一に散布 する。	・対象雑草は1年生雑草。 ・その他注意事項は前頁参 照。
	生育期処理 は種後～ 麦2葉期 (雑草発生前 ～イネ科雑 草1葉期ま で)	リベレーターG ジフルフェニカン 0.2% フルフェナセット 0.6%	1 (1) (1)	全面土壌散布 4～5 kg	土壌全面均一 に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。 ・砂土を除く。
	生育期処理 は種後～ 麦3葉期 (雑草発生前 ～発生始期)	ハーモニー細粒剤F チフェンスルフロンメチル 0.15%	1 (1)	全面土壌散布 4～5 kg	土壌全面均一 に散布する。	・対象雑草は1年生広葉雑 草およびスズメノテッポウ。 ・砕土、整地、覆土を丁寧 に行い、均一に散布する。 ・発生前から発生始期のス ズメノテッポウや多くの一 年生雑草に優れた除草効 果を発揮する。 ・周辺の作物に飛散する恐 れがある場合は散布しな い。 ・砂土を除く。
	生育期処理 は種後～ 麦3葉期 (雑草発生前 ～イネ科雑 草1葉期ま で)	リベレーターフロアブル ジフルフェニカン 8.4% フルフェナセット 33.6%	1 (1) (1)	雑草茎葉散布 又は全面土壌 散布 60～80 ml	100 lの水に溶 かして全面均 一に散布す る。	・対象雑草は1年生雑草。 ・砂土を除く。

作物名	使用時期	除 草 剤 名	使用回数	10 アール 当たり使用量	使用方法	注意事項
大 麦 (小麦)	生育期処理 は種後～ 節間伸長前 (但し、スズメ ノテッポウ5 葉期まで)	ハーモニー75DF水和剤 チフェンスルフロンメチル 75%	1 (1)	雑草茎葉散布 又は 全面土壌散布 5～10g	50～100ℓの水 に溶かして全 面均一に散布 する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は1年生広葉雑草およびスズメノテッポウ。 生育期のスズメノテッポウや多くの一年生広葉雑草に優れた除草効果を発揮する。 周辺の作物に飛散する恐れがある場合は散布しない(ドリフトレスノズルの使用が望ましい)。 タンク及び使用器具は使用后すみやかに消石灰を用いて洗浄する。
	穂ばらみ期まで(雑草生育初期)	アクチノール乳剤 アイキシニル 30.0%	2 (2)	雑草茎葉散布 100～200ml	70～100ℓの水 に希釈して散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は畑地一年生雑草

※使用回数については農薬の使用回数、および成分毎の使用回数(成分名の記載と同じ行に記載される括弧書きの数字)を記載した。

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
だいず	は種直後 (雑草発生前)	クリアターン細粒剤F ベンチオカーブ 8% ペンディメタリン 0.8% リニュロン 1.2%	1 (1) (1) (2)	全面土壌散布 4~5 kg	土壌全面均一 に散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は1年生雑草。また、トレファノサイド乳剤および同粒剤2.5はツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く。 覆土は細かく砕いた土を用い3cm位丁寧に行い、土壌表面をなるべく均平にする。 散布直後に多量の降雨が予想される場合は散布を延期する。 土壌が極端に乾燥していると効果が劣るので散布水量を多めにするか降雨後に散布する。 直径2cm以下の土塊重量が全体の60%以上になるよう砕土する。 雑草発生前(は種後日数を置かない)に土壌表面にムラなく均一に散布する。 粒剤は乳剤よりも効果が変動するので注意する。 ☉(トレファノサイド乳剤、プロールプラス乳剤) エコトップP細粒剤F、エコトップP乳剤、プロールプラス乳剤は砂土を除く全土壌。 散布後は散布器のタンクやホース・ノズル十分に洗浄する。 対象雑草は1年生広葉雑草 前処理として土壌処理剤を使用。 砂土では使用しない。 展着剤を加用しない。 周辺作物に影響を与える可能性があるので飛散に注意する。
		クリアターン乳剤 ベンチオカーブ 50% ペンディメタリン 5% リニュロン 7.5%	1 (1) (1) (2)	全面土壌散布 500~800ml	70~100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後～ 出芽前 (雑草発生前)	サターンバアロ粒剤 ベンチオカーブ 8% プロメトリン 0.8%	1 (1) (1)	全面土壌散布 4~6 kg	土壌全面均一 に散布する。	
	は種後出芽前	サターンバアロ乳剤 ベンチオカーブ 50% プロメトリン 5%	1 (1) (1)	全面土壌散布 600~1000 ml	70~100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
		トレファノサイド粒剤2.5 トリフルラリン 2.5%	1 (2)	全面土壌散布 4~6 kg	土壌全面均一 に散布する。	
		トレファノサイド乳剤 トリフルラリン 44.5%	1 (2)	全面土壌散布 200~300ml	100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後出芽前 (雑草発生前)	エコトップP細粒剤F ジメテナミドP 1% リニュロン 1.4%	1 (1) (2)	全面土壌散布 4~6 kg	土壌全面均一 に散布する。	
		エコトップP乳剤 ジメテナミドP 8.5% リニュロン 12%	1 (1) (2)	全面土壌散布 400~600ml	100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
		プロールプラス乳剤 ジメテナミドP 6.7% ペンディメタリン 6.5% リニュロン 11.4%	1 (1) (1) (2)	全面土壌散布 400~600ml	70~150ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
		フルミオWDG フルミオキサジン 50%	1 (1)	土壌全面散布 5~10g	100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
出芽直前～3 葉期まで(雑 草発生始期 ～2葉期)	パワーガイザー液剤 イマザモックスアンモニウム塩 0.85%	1 (2)	雑草茎葉散布 又は全面土壌 散布 200~300ml	100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。		

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
だいず	雑草生育期 イネ科雑草 3～5葉期 (収穫60日前まで)	ワンサイドP乳剤 フルアジホップP 17.5%	1 (1)	雑草茎葉散布 75～100ml	25～100ℓの水に溶かして散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)。 ワンサイドP乳剤はシバムギ、レッドトップにも登録がある。 イネ科雑草に優れた効果があるが、広葉雑草およびカヤツリグサには効果がない。 遅効性のため、枯殺するまで日数を要する。 周辺のイネ科作物にかからないように散布する。
	雑草生育期 イネ科雑草 3～5葉期 (収穫30日前まで)	ナブ乳剤 セトキシジム 20%	1 (1)	雑草茎葉散布 150～200ml	100～150ℓの水に溶かして散布する。	
	雑草生育期 イネ科雑草 6～8葉期 (収穫30日前まで)			雑草茎葉散布 200ml	100ℓの水に溶かして散布する。	
	耕起前または 出芽前まで	ラウンドアップ マックスロード グリホサートカリウム塩 48%	2 (4)	雑草茎葉散布 200～500ml	50～100ℓの水に溶かして散布する。	対象は1年生雑草。
	雑草生育期: 畦間処理収穫 前日まで		2 (4)	200～500ml		
	雑草生育期 落葉終期～ 収穫14日前 まで		1 (4)	雑草茎葉散布 500ml		
	雑草生育期 イネ科雑草 3～10葉期 (収穫30日前まで)	ポルトフロアブル キザロホップエチル 7%	1 (1)	雑草茎葉散布 または 全面散布 200～300ml	50～100ℓの水に溶かして散布する。	対象雑草は一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)。
	雑草生育初期 ～6葉期 (大豆2葉期 ～開花前まで) (収穫45日前まで)	大豆バサグラン液剤 (ナトリウム塩) ペンタゾン 40%	1 (2)	雑草茎葉散布 100～150ml	100ℓの水に溶かして散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は1年生雑草(イネ科を除く) 広葉雑草に効果を示すが、効果がない雑草草種もあるので注意する。 (3)-1参照。 大豆に葉害が生じる場合があるので(3)-1 <u>注意事項を遵守する。</u>
本葉2葉期 ～開花前 (雑草生育期) (収穫45日前まで)	アタックショット乳剤 フルチアセットメチル 2.0%	1 (1)	雑草茎葉散布 または 全面散布 30～50ml	100ℓの水に溶かして散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 土壌処理剤との体系で使用する。 他の除草剤との混用、展着剤の加用はしない。 処理後6時間以内の降雨があると効果が劣る場合があるので注意する。 	

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
だいず	大豆本葉3葉期以降 雑草生育期 (収穫30日前まで)	ロロックス リニュロン 50%	1 (1)	雑草茎葉兼 土壌散布 (畦間・株間処理) 100～200g	70～150ℓの水 に溶かして散 布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は一年生雑草。 専用ノズルを使用し、噴口をなるべく低くして作物の葉にかからないようにする(作物の成長点付近に薬剤を付着させない)。 イネ科雑草には効果が劣る場合がある。
	雑草生育期 ・は種後出芽前 ・畦間処理 (収穫28日前まで)	バスタ液剤 グルホシネート 18.5%	3 (3)	雑草茎葉散布 300～500ml	100～150 ℓの 水に溶かして 散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は一年生雑草。 作物に飛散しないようになるべくドリフトレスノズルを使用し、雑草の茎葉全体に付着するように散布する。 風のない日に散布する。
	雑草生育期 畦間処理 (収穫28日前まで)	ザクサ液剤 グルホシネートPナトリウム塩 11.5%	3 (3)	雑草茎葉散布 300～500ml	100～150 ℓの 水に溶かして 散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は一年生雑草。 作物に飛散しないようになるべくドリフトレスノズルを使用し、雑草の茎葉全体に付着するように散布する。 風のない日に散布する。
	雑草生育期 畦間処理 (本葉5葉期 以降) (収穫30日前まで)	ダイロンゾル DDVU 50%	1 (1)	雑草茎葉散布 又は全面土壌 散布 100～200ml	100 ℓの水に 溶かして散 布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は一年生雑草。 作物に飛散しないようになるべくドリフトレスノズルを使用し、雑草の茎葉全体に付着するように散布する。 風のない日に散布する。
	雑草生育期 畦間処理 (雑草の草丈 30cm以下) (収穫3日前まで)	プリグロックス L ジクワット 7% パラコート 5%	4 (4) (4)	雑草茎葉散布 600～1000ml	100～150 ℓの 水に溶かして 散布する。	<ul style="list-style-type: none"> 対象雑草は一年生雑草。 作物に飛散させない。 毒物。☠

※ 使用回数については農薬の使用回数、および成分毎の使用回数(成分名の記載と同じ行に記載される括弧書きの数字)を記載した

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール 当たり使用量	使用方法	注意事項
そば	播種前 (雑草生育期)	ザクサ液剤 グルホシネートPナトリウム塩 11.5%	3 (3)	300～500ml	100～150ℓの 水に溶かして 散布する(雑 草茎葉散布)。	<ul style="list-style-type: none"> ・対象雑草は一年生雑草。 ・養魚田およびその付近では使用しない。
	耕起前または 播種前 (雑草生育期)	ラウンドアップ マックスロード グリホサートカリウム塩 48%	2 (2)	200～500ml	50～100ℓの 水に溶かして 散布する(雑 草茎葉散布)。	<ul style="list-style-type: none"> ・対象雑草は一年生および多年生雑草。 ・散布後2時間以内に降雨が予想される場合は散布を見合わせる。 ・専用ノズルを使用する。 ・排水溝および排水溝まで飛散する恐れがある所では使用しない。 ・養魚田およびその付近では使用しない。 ・眼に入らないよう注意する。 ・皮膚に付着しないよう注意する。

※使用回数については農薬の使用回数、および成分毎の使用回数(成分名の記載と同じ行に記載される括弧書きの数字)を記載した。

(3) 大豆バサグラン液剤の使用について

① 使用方法

作物名	対象雑草名	使用時期	除草剤名	10アール当たり使用量	使用方法	使用回数
だいず	一年生雑草 (イネ科を除く)	一年生広葉雑草の 生育初期～6葉期 (ダイズの2葉期～ 開花前まで、但し 収穫45日前まで)	大豆バサグラン液剤(Na 塩) ベンタゾン 40%	100～ 150ml	100 ℓ の水に 溶かして散布 する(雑草茎 葉散布)。	1 回

② 使用上の注意事項

だいずの除草対策は、は種覆土直後の除草剤散布と中耕・培土2回による雑草の発生抑制を基本とする。

中耕・培土が適正に実施できず畑地一年生広葉雑草が問題となる圃場で、開花前の早い時期に散布する。

ア だいずの品種によっては薬害(葉に斑点、色抜け、黄変、縮葉症状等の一過性のもの)により減収する場合があるので、本剤の使用にあたっては指導機関に相談するなど十分注意する。また、使用者の責任において事前に使用品種における薬害の程度を十分確認してから使用する。

イ 適用雑草は一年生広葉雑草であるが、アカザ科、ヒユ科、トウダイグサ科の雑草には効果が劣る。

ウ 本県では、「エンレイ」および「里のほほえみ」に使用可能である。「あやこがね」は薬害が強くなることもあるため使用を避ける。

エ 除草効果を高め、薬害の発生および助長を防ぐため、薬液が雑草全体によく付着し、だいずへの付着量が極力少なくなるように散布する。また、薬害を助長するので重複散布はしない。

オ ①著しい高温が続く場合、②日射が強く蒸散が盛んな場合、③低温、湿害、肥料不足等によりだいずが生育不良の場合は薬害を助長することがあるので、使用を避ける。

カ 降雨後の土壌が湿潤な状態(溝に停滞水がある)で散布すると、散布薬剤がだいずに吸収され、株全体が黄化等の薬害を起すため、このような状態では使用を避ける。

キ 他剤との混用は避ける。

ク 散布後、曇天、降雨日が長く続くと効果が劣ることがあるので留意する。

ケ 周辺作物にかからないように注意する。

コ 本剤を使用した場合は、えだまめ用途としない(えだまめでは登録がない)。

(4) ラウンドアップマックスロード(だいずの落葉終期)の使用について

- 1) 落葉終期とは、だいずの葉の大部分が落葉した時期とする。
- 2) 薬液がだいずにかからないように散布する。
- 3) 水分含量の高い果実をつけた雑草では、茎葉が枯れても果実が残る場合があり、汚損粒の原因となるので収穫前に除去等を行うこと。また、雑草の茎水分含量が高い場合も汚損粒の原因になるので、収穫前に除去等を行うこと。
- 4) 気温が低下する条件での処理であり、効果の完成まで2週間以上の期間を要するので、収穫時期は処理後3週間を目安とする。

(5) 大麦（小麦）の圃場内の周縁部における除草剤使用について

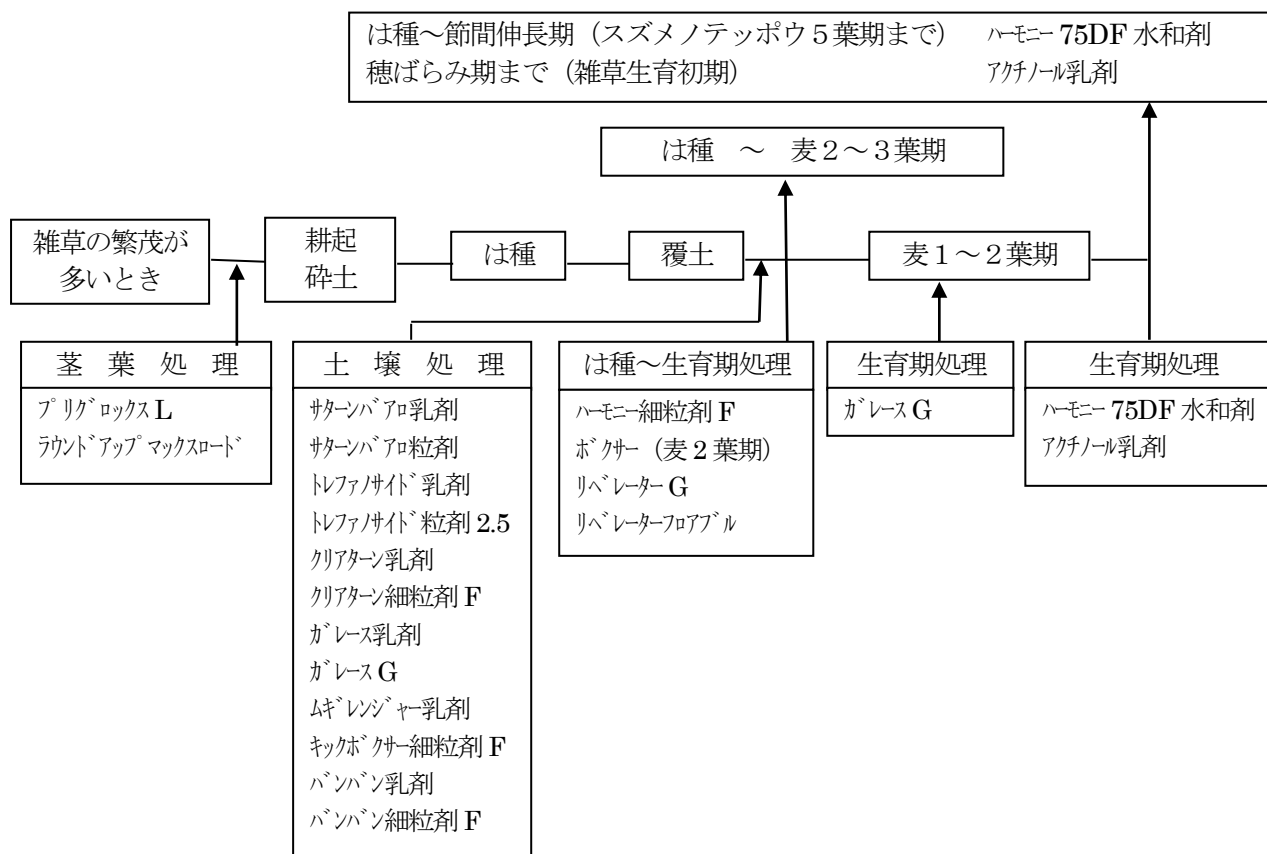
「圃場内の周縁部」とは、圃場内であって作物が植えられていない周縁部分を示す。排水溝内に農薬を散布すると水を介して河川等へ飛散、流入する可能性がある場合は、排水溝内への散布は控える。

(6) 水田転換畑の麦類・だいず等の畦畔で除草剤を使用する際の注意点

除草剤の中で適用場所が「水田畦畔」と限定されているものについては、その水田で「水稻」が栽培されている場合に限って使用できる。麦類・だいず等の水稻以外の作物が栽培されている水田の畦畔には、「水田畦畔」で登録がある除草剤でも使用できない。水田畦畔には、水田で栽培されている作物（麦類やだいず）に適用がある除草剤を、登録内容を遵守して使用しなければならない。

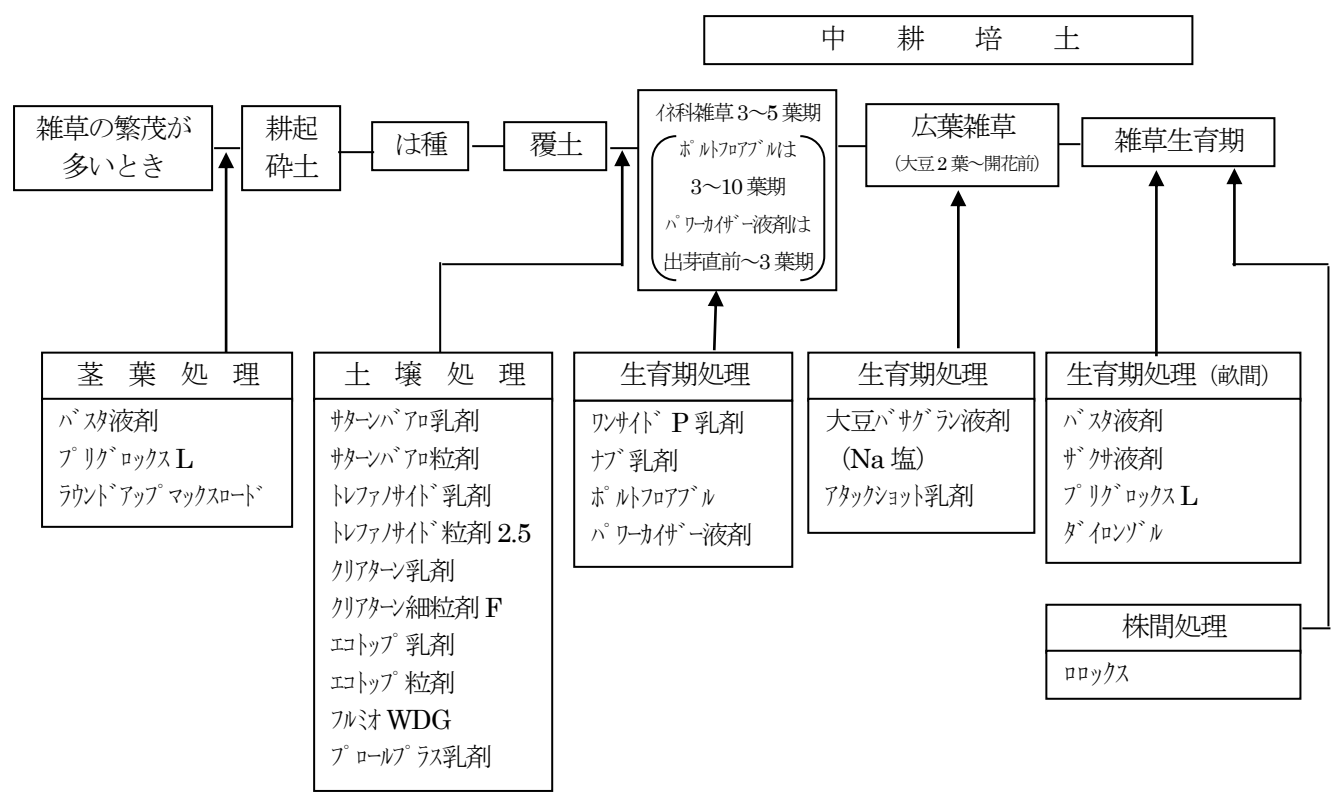
(7) 除草剤体系（例）

① 大麦の除草



- ・サターンバアロ乳剤・粒剤とクリアターン乳剤・細粒剤Fは、いずれか一つを1回だけ使用できる。
- ・クリアターン乳剤・細粒剤Fとムギレンジャー乳剤、キックボクサー細粒剤Fは、いずれか一つを1回だけ使用できる。
- ・ガレス乳剤・Gとバンバン乳剤・細粒剤FとリベレーターG・フロアブルは、いずれか一つを1回だけ使用できる。
- ・ハーモニー細粒剤Fとハーモニー75DF水和剤は、いずれか一つを1回だけ使用できる。
- ・早まきは、温暖なため雑草の出芽や再生にも好適なことから、雑草が多発しやすい。
- ・春、雑草が目立ってからでは除草できないので、越冬前の除草に努める。

② だいずの除草



- 生育期処理の除草剤は、使用できる時期（収穫前日数）に制限があるので、処理の際に注意する。
- だいずの生育量を確保し、抑草効果を高める。
- 排水対策の徹底に努め、碎土、は種、覆土を丁寧に行い、特にだいずの出芽および初期生育を促す。
- 中耕・碎土を早めに丁寧に実施し、雑草の小さいうちに確実に覆う。
- 収穫期に残った大きな雑草は、コンバイン収穫すると汚損粒の原因となるので、手で抜き取る。